

第49回 国際福祉機器展に参加して

小島 みさお

- 1) 東京都健康長寿医療センター研究所
- 2) 国際医療福祉大学大学院 福祉支援工学分野

1. はじめに

コロナ禍の開催でもあり、展示ブース間の通路は広く取りつつ、342社（Web展のみ出展を含む）の企業・団体が出展し、10月5日～7日の来場者数は39,647人であった。

国内唯一の福祉用具領域がある大学院に所属している筆者は10年以上にわたり参加しているが、今回は、脳血管疾患後遺症の家族を持つ姉と一緒に会場を回った様子を紹介したい。

2. リアル展ならではの「自助具制作講習会」

当事者家族であり初参加の姉が真っ先に行きかけたコーナーは、「福祉用具相談」と自助具制作体験講習会であった。



図1 グリップ付きスプーン制作の様子

その場で自助具が作れる制作体験会（事前予約制）は、各回定員20名で開催された。60分のプログラムは、主催者の紹介の後、自助具作りの基礎

知識の講義（10分）、「グリップ付きスプーン」（20分）と「ストローホルダー」（25分）の制作体験の構成で、作業療法分野の演習体験ができ、制作物は持ち帰れるという嬉しい企画であった。

3. 対面開催ならではの試用・試乗体験

電動車椅子等の試乗や介護用ベッドの試用は、長蛇の列であった。

昨今、介護ロボットの開発・実証・普及が進んでいる中、出展社プレゼンテーションコーナーでは、介護ロボットによる移乗介助の実例紹介等が1社1時間枠で行なわれた。特徴を理解した後、各展示ブースで試乗し、操作のコツや留意点を把握できる試乗体験は、リアル開催の醍醐味である。



図2 移乗サポートロボット Hug 試乗中の筆者

4. 対象者別コーナー「こども広場」の拡充

障害のある子ども向けの福祉機器展示と相談コーナーの拡充は、特筆すべきである。車椅子や学習支援機器用品、eスポーツ等の展示をコーナー化し、各所に説明員が配置され、広い体験スペースが確

-
- 1) 東京都健康長寿医療センター研究所
〒173-0015 東京都板橋区栄町 35-2

保されていた。また、QRコードを読み取ることにより、詳しい解説資料も入手でき、ペーパーレス化されていた点も、かさばらないので子ども連れの家族には好評であったと思われる。



図3 こども広場の車椅子コーナー

5. 出展企業・団体の傾向の変化

今回の特徴として、「コミュニケーション・見守り機器」コーナーが、例年よりも会場の広いスペースを占めていたことも報告したい。IT・デジタル技術の発展により、これまで提供できなかった新しい価値が次々に生まれてきている。デジタル技術を活用して製品やサービス、ビジネスプロセスを変革することにより、新たな価値を生み出していく活動、いわゆるDX（デジタルトランスフォーメーション）の様々な試みを各企業が展示していたので、いくつか紹介したい。



図4 コミュニケーション・見守り機器コーナー

- 機能のシンプル化を謳う、離床センサーや車椅子センサー
- 家族や介護事業所、ケアマネジャーに寝起き・睡眠状態を共有するWi-Fi不要の在宅見守りサービス

○ 話すだけで自動記録できる介護記録 ICT 化

その他のコーナーでも、時代を反映した用具がみられた。例えば、コロナ禍での需要を反映させた、“抗菌・抗ウイルス加工”の床ズレ防止マットやポジショニングクッションの展示があったり、“自立支援”をサポートする福祉用具として、トイレ内で足の踏み換えが難しい方向への回転式縦手すりの紹介もあった。



図5 トイレ動作の補助になる回転式縦手すり

6. おわりに

相談や製作講習などのリアル展示会の良さとともに先端の介護ロボットなど、時代の変化を感じた。

出展者によると、高校や大学、専門学校の学生が、授業の一環で参加する傾向もあり、ビジネスにつなげたい出展者は、サンプルや資料入手には名刺交換を求める傾向もあるようだ。しかし、「福祉機器の今と未来を見て、さわって、たしかめる3日間」と銘うって開催しているH.C.R.こそ、これから福祉・介護・リハビリ・ヘルスケア業界の人材となろうとする若者を含め、さまざまな来場者に、体験と学びの機会を提供する場であり続けることを切に望む。

来年2023年、国際福祉機器展は50周年を迎える。様々な企画やイベントも予定されているとのことで、今から楽しみである。

【引用】

- 1) 国際福祉機器展 2022 ホームページより
<https://hcr.or.jp/exhibitions/detail>